

## 令和3年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

- 1 日時：令和3年5月28日（金）14：30～16：30
- 2 場所：オーテピア 4階 ホール
- 3 出席者：  
〔委員〕加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員（リモート）、常世田委員（リモート）  
〔オーテピア高知図書館〕山崎高知県立図書館長、森岡高知市立市民図書館長 ほか
- 4 議事次第
  - (1) 開会
  - (2) 議事
    - ア オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について
    - イ 第2期オーテピア高知図書館サービス計画素案について
  - (3) その他

### 【委員】

それでは、ただ今の事務局からの説明に対して、委員から意見、質問をいただきたい。委員から願います。

### 【委員】

コロナで利用実績が落ちているのは、どこの図書館でもそう。前回の打ち合わせでも話したが、例えば、開館しているときのひと月単位での実績の数値を出して、従来のコロナの影響がない時点の数字と比較する。一種の修正値で比較するというのも必要ではないかと思う。そうすると、利用は決して落ちてないと思う。

### 【委員】

委員いかがか。

### 【委員】

資料1の2ページ目の県立学校図書館等との連携について。高知県は東西に非常に広いが、いろいろと訪問して活動しているということ。今回は特に実習助手が配置されているという観点から訪問したとのことだが、この連携の枠組みは、今後、すべての県立学校に広がっていったらよいと思う。その辺の見通しはどうか。

### 【委員】

事務局から願います。

### 【事務局】

実習助手が配置されているところだけではなく、私立の学校も含めて、担当職員とともに私も一緒に学校訪問している。学校図書館を支援するうえで、実習助手の方だけに話をしても、学校との連携はなかなか進まないと思っている。私が行くことによって、学校長や教頭に直接お目にかかり、図書館の活性化、オーテピアとの連携、そして、特に産業系の高校についてはオーテピアを場として活用し、学校のPRをしてもらえるようお願いしている。

### 【委員】

よろしいか。委員、願います。

【委員】

学校訪問は非常に大事だと思う。私も図書館長のときに、各学校を訪問し、司書と話をするだけでなく、校長や事務長といった実際に学校を動かしている人たちと話をした。そのところでもう一つ、もうやっているかもしれないが、学校のことを相談するのならこの司書としてくださいという人を同行させて、その司書と校長や事務長等との顔つなぎと言うか、その司書を信頼しているいろいろ相談してもらえるような下地を館長がつくると、なおさら効果的であろうと思う。

【事務局：】

私が訪問するときには、県立学校支援の担当の司書だけではなく、例えばティーンズ・サービスの担当であったり、特別支援学校だったらバリアフリーサービスの担当であったり、より顔の見える関係が構築できるように司書を同行させている。

【委員】

その他よろしいか。今、非常に貴重なご指摘で、やはり最後は人と人とのつながりかという感想も持った。

それでは、議事2に移りたいと思う。第2期オーテピア高知図書館サービス計画の素案について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

※議事（2）－イ「第2期オーテピア高知図書館サービス計画素案」について説明

【委員】

それでは、素案に対して委員からの意見をいただきたいと思う。

【委員】

今から話すことは個別のこともあるが、もう1回全体を押さえたうえで、私としては気になっているというか、ここはもう1回念押しをしておきたいというところをあげたいと思う。全体のことを最初に話して、そのあとに4点ばかり個別のことを加えたい。

先に、先ほどの指標のことについて、これは予定してなかったことだが、市町村とか学校へ貸し出す資料の数字はぜひ取ってもらいたい。一番大きな理由は、オーテピアができる前とできて以降というのをまず比べたいというのが一つ。それから、先ほど館長が各学校を訪問するといった話をしていたし、市民図書館の館長もいろいろ努力していると伺っている。そういった中で、学校だとか大学だとかいったところで今まで以上にオーテピアの資料が関われるということは、非常に狙うべきことと言うか。特に、県立の場合は自館で貸し出す以上に、市町村、あるいは学校を通じて手元に届けるというのは、ある意味本来の姿でもあるので、そのところが大きく伸びていく様子をぜひ押さえておいていただきたい。

それで、まず全体の話からになるが、指標、それから館長以下職員の考え方の方向は非常によい方向に向かっていると思う。10年ぐらいお付き合いしているが、ずっと見ていてここ1、2年の変化は非常に大きい、よい方向に向かっているということをもっと申し上げておきたい。

ベースになることとして、やはり図書館が単なる教育機関というだけではないということをよく理解して動いているという感じを持つ。県全体あるいは市全体の行政だとか経済だとか、さまざまな分野に対して図書館は大きなプラスを

与えることができるということ。その辺りのことを最初は今一つ飲み込めてなかったような感じもするが、だんだんとそれが実際にやっていくに従って、実感を持って腹入りをされてきたのではないのか。実際にそういうふうなプラスも提供しつつあるというか、それが伸びてきているというような感じを持っている。

この点については、行政なり議会なりあるいは県民や市民の皆さんにさらに理解してもらおう努力をしなければならないということは当然だが、それを含めて図書館というものがいかなるものであるのか、単なる教育機関ではなくて、本来にある意味、さまざまな物の中心になって情報提供をすることによって世の中をどんどん変えていくことができる、あるいはいろいろな物を支えていくことができるという組織であるということを理解しておいてもらいたい。

特にその中で、図書館というものは県内だけを見るべきではないと思っている。これも以前に言ったが、地域間競争というのが非常に激しくなっている。例えば、あとで申し上げるが、このコロナ禍の中で都市部から移住ということを考える人たちがたくさん出てきている。そのときに地域間競争で勝ち抜く柱の一つに図書館はなり得るというような意味合いで、例えば、地域おこし等あるいはビジネスでも有効である。鳥取県の場合は、図書館を利用して、あるいは図書館の相談会を通じて起業したり、経営改善に取り組んだりするような企業が結構多い。そういった面でも図書館は大きな力を持っている。そういった図書館の持つ幅広さとか敷居の低さとか、それから当然膨大な資料、データベース、それに人のつながり、そういったものに裏付けられた図書館が地域にどう貢献するのかといった視点を持って今は動いてもらっていると私は理解をしている。

私自身が元々行政出身で、財政課を10年経験している。その他にも教育だとか商工だとか、あるいは総合事務所長だとかいろんな仕事を通じて、図書館長をやった以降の図書館の利用ということについては自分の仕事の中でも進めてきたり、あるいは市町村長や議員さんに対しても働きかけたりなどしてきた。やはりそういうものを受け入れて動いたところは伸びているということも、もう一度ここで確認しておきたい。

個別のことについて要点を述べたい。一つは、先ほど入れてもらっていた情報弱者について。これは、実はなかなか書き方が難しいと思っている。この間から、コロナのいろいろな情報関係の番組を見ていて、驚いたことが一つあった。それは、「私はワクチンの接種をしたくない。だけど、職場では皆がしていて、私がしないと言うと、『あなたは何で接種しないのか』といった感じで扱われる」というような話だった。それに対して、その番組の中では、「個人の自由」云々みたいな話が出ていた。でも、この人は医療関係者だった。医療関係者がなぜそういうふうにしたかということ、ネット情報にある意味真に受けて、だから私はワクチンを受けたくないと。でも、医療関係者であれば、自分がうつすだとかあるいは自分が感染することによって、自分が働いている現場にどれだけ大きなダメージを与えるかということ考えた場合に、疾患などで体質的に無理だといった事情があるなら分かるが、ネット情報を丸飲みにして、それで「私はワクチンを受けたくないと」言ったこと自体に、本当に愕然とした。

これこそ私はある意味の情報弱者だと思う。正しい情報をきちんと手に取るためのノウハウを持たずして、誤った情報でも自分が情報をたくさんもらっていると思い込んでしまっただけで困る。

この間から学校図書館にこだわっているのは大きく分けると二つある。一つは、こういった正しい情報認識を子どもの頃からきちんと教えることによって、情報リテラシーを身に付けて社会に出ていってほしい。今、自己責任を求められる社会になっている中で、正しい判断というか、自分にとって本当に適当な判断ができる人間として生き抜いていける、そういうリテラシーを身につけてほしいのが一つ。

もう一つはもっと現実的な話として、いざというとき、自分が本当に生活に困ったり、にっちもさっちもいなくなったりしたときに図書館を頼ろうと思いついてくれる子どもになってほしい。前者に比べるともっと切実な話であるが。

そういったところで、実は今の社会の中で言うと、にっちもさっちもいなくなった人は、情報を自分で取ろうともせずそのまま放置していたり、下手すると自殺したりというようなところに行きついてしまっていることは結構多い。そうではなくて、自分はこれからどうしたらいいだろうか、困った、じゃあ図書館にでも行って考えてみる材料を探してみようかと思いついてくれるような子どもたちに育てたい。

特に、高知、鳥取もそうだが、情報が豊かなところではないけれども、図書館は情報提供という点で圧倒的に情報を持っているところである。だから、「そういったところを最後は頼ればいいんだ」という気持ちを持つようにぜひ育てたいと思っている。

それから、オーテピアは、他にはない市と県とが協力し合いながらさまざまな事業展開できるという意味合いで、これもこの間から言っているが、幼保から高校卒業し、場合によっては大学までとなるわけだが一気通貫でそういった情報に関して両館が協力して、各段階の学校と協力しながら子どもたちを育てていくことができる。それが、将来の高知を支える大きな材料になると思う。

ということで、だからどこをこう書けというのがなかなか難しいが、そういったことをもう一回考えて文言だとか並べ方を考えてもらおうと嬉しいというのがまず一点目。

次が、さっき言った移住者。先ほど申し上げたような状況はもうすでに出てきている。県、市の情報提供をするときに、要は来られた方が「使ってみて良かった」ではなくて、今どこに行こうかと考えている方に対して、オーテピアがこれだけのものを持っていてウェルカムなサービスを提供していることをどう届けるかということと言うと、これは図書館だけの努力では絶対無理である。

先ほど漫画を作るといった話があったが、要はそういったことが必要となる。図書館を一つの売りにすべきだと。これも以前に言ったが、移住を考える人の中には、じゃあそこの教育環境はどうだとか、あるいは情報環境はどうだとか、そういったことを気にされる方はかなり多い。そのときに、オーテピアがある、オーテピアに来られたらこれだけのものが準備されていて、これだけの訓練された司書がいて、さらに、いろいろなところとのネットワークを持っているからあなたの必要な情報を私たちは全力でカバーするというのを、ぜひ移住を今考えている人たちに伝える努力を。これは知事部局と一緒にできないが、ぜひ積極的に働きかけてそういったことを展開してもらいたい。

それからその次、SDGsに関して。それぞれについては書かないということで、今どうしても入れろとは言わない。ただ、これからSDGsは後退することはまずないと思う。それぞれの県あるいはそれぞれの企業でSDGsに向かってこれだけのことをやっているということをアピールする力、あるいはそれを押すというか、圧力はもっと高くなってくだろうと。

鳥取県も実は、もうそろそろ「鳥取県立図書館の目指す図書館像」というのを作り直しに入ろうとしている。鳥取県の場合はSDGs推進本部というのをわざわざ総務部長を異動させて本部長にしてSDGsの推進を全県で図ろうとしている。それは、いろいろな意味でそれを図っていかないと世の中から遅れる。あるいは、先ほど言った移住だとか先のこの見える人間からしてみると、県がきちんと前向きにやっているということを理解してもらうには、やはり皆さんよりも半歩から一歩前を進んでいかないとそういったことが理解してもらいにくいのではないのかと思う。

SDGsは、県庁でいうと全部の分野に全部の部局に関連する項目が入っている。そういう意味から言うと、図書館がいかにオールマイティにそれぞれの部局が抱えている課題に対してサポートができるかということをお願いする絶好のチャンスだと思う。そういう意味で、そういったところに対して図書館はこういったことができるということを別資料でも何でも構わないから、SDGsというのを図書館がこれから動いていくための一つの柱と考えてやってほしい。ある意味、これは図書館にとってもとても大きなチャンスだと思っている。

昔々、委員と一緒に、『これからの図書館像』というのを作ったときに、「文部科学省に図書館がぶら下がっているんじゃないくて、内閣府だとかそういう政府全体に対してものが言えるようなところに図書館をぶら下げてもらったほうが本当はよい」というようなことを言ったことがあるが、私は今でもそう思っている。図書館が教育委員会にあることを否定はしないし、それでメリットもあるが、一方で、すべての部局に対して、今言ったようなよい影響を提供することができるという意味で言えば、中核に座ってもよいぐらいだと思っている。それが分かってもらえるチャンスとしてこの

SDGsをぜひ捉えてもらいたい。

それと合わせて、そのことを職員の方もしっかり自覚していただきたい。SDGsは我々にとっての大きなチャンスで

あるということ。だから、それぞれが、担当する分野において、自分のところはどうかと問われたときに、「それだったら、こういった項目について我々はこういったサポートができる」ということをSDGsの項目ごとに言えるぐらいにはしてあげていただきたい。

それから、最後の四つ目だが、大学等のことについて入れてもらったのは本当によいと思う。教育機関の中でも高等教育機関がある意味、県とか市とかとは別の次元にあるようにイメージをする人がいる。でも、現実問題からすると大学は本当に行政にとってさまざまな意味でプラスを与えてくれる大事な場所である。特に地方であれば、鳥取はまさにそうだったわけだが、鳥取県の中には4大学ぐらいしかなかった時代がずっと続いていた。一方、委員が今いる立命館などは、京都で同志社大、京大とコンソーシアムを組んで、莫大な資料費と人員を持って必要な情報提供を学生にも教授にもしていた。ここの格差はものすごく大きい。なおかつ、大学図書館というのは、いわゆるジャーナルと言われる海外の文献、それを電子的に提供することに大きなお金を割いて、7、8割は持っていかれているのではないと思うぐらい、そっちに払っている。残っているお金はそんなにたいしたことはない。だから、学部の学生が読むような初級、中級の専門書がなかったり、ましてや一般教養の本は貧弱な状態におかれていたりする。

一方、その状態を放置しておけば、例えば立命館に行った人からは、「うちの大学ではそんなことで苦労したことはない」と言われれば、学生だって面白くないし、やる気がなくなる。そのようなことが積み重なっていけば、だんだん高知の大学には良い学生が入ってこなくなる。そうなってくると、高知にいる良い教授までいなくなってしまい、学生の質が落ちる。そうやってきてしまったら、それは、高知県、高知市にとってどれだけ大きなダメージになるか。そういうかなり長いスパンで1回ものを考えて、大学との付き合いということを図書館はしっかりやっていくことを考えた方がよいと思う。

大学というのは地域にとって、「推進役」でもあり、「お目付け役」でもあり、さまざまな意味で、特に小さな県にとっては国立大学あるいは県立大学はとても大きな存在である。そういったものが少しでも前向きに動けるようぜひオーピニアは全面的に前に出してやっていただきたい。

だから、先ほど言われたような本を貸すようなときにも、できるだけ手軽に借りられるようなやり方を考えてほしい。それから、イベントをやるときは、例えば大学がやっているさまざまな先駆的な研究について、県民、市民に知らせるようなことを一緒になってやることで、大学を盛り上げていく。そういったかたちでの協力関係を強固に作ってもらいたいと思う。

以上の四つだが、最初に申し上げたが、計画はかなり前進をしてきていると思うし、実績もかなりそれに追いついてきていると思う。箱はできた、形はできた。次は、気を緩めずにさらに有効なシステムになるために前向きに進めていくということで、また我々も協力したいと思うので頑張ってもらいたい。

#### 【委員】

事務局から意見等あるか。

#### 【事務局】

説明で漏れてしまったかもしれないが、指標について、資料4の22ページに協力貸出点数と県立学校図書館等との連携にも貸出点数の目標値を上げている。

#### 【委員】

さっきも少し言ったが、以前からの流れが分かるようにしてほしい。去年と今年を比較するというのではなく、ここの部分については、10年前はどうだったのかというところからはじめるべきではないかと思う。

#### 【委員】

よろしいか。では、事務局から願います。

【事務局】

情報弱者のところだが、子どもの頃からきちんとこの情報を読み書きする方法であるとか選択する方法であるとか、そういうものをきちんと身に付けていくようにしていきたいと思う。そのために、この情報リテラシーということについて、現行では、取組が点であって継続したものになってないということが、館内で議論したときに明らかになった。次期サービス計画では発達段階に応じた、それと分野と言うか、それぞれいろいろなリテラシーがあると思うが、そのプログラムのようなものをぜひ作っていききたいということで今、職員が検討している段階である。

【事務局】

まだ説明ができる段階ではないが、リテラシーの問題は対象者によっていろいろ変わってくると思うので、マトリックスを作り、検討している段階である。

【委員】

その他よろしいか。それでは、委員願います。

【委員】

一つは、図書館のイメージについて。私自身、会場にいる現場の図書館員の方たちも含めてであるが、なかなか旧来の図書館イメージから脱出するのが難しい。だから、やはりこの従来の子どもと絵本、それから文化教養路線みたいなイメージを変えるということは、繰り返しになるが、個人的にも組織的にもアピールを続ける、見直しを続けるということをする。それで、こういう文章については意識的にバイアスをかけるということが必要だと思う。

それで、委員が言った地域間競争というところ。地域間競争に図書館が役に立つと本当に思っている人はいない。だからそこを、やはり行政が出すこういった計画書とか報告書は、単なる字面を整えるということではなくて、本当に委員が言ったようなことを本気でやるということが、文章化されていることが重要だと思う。

行政の文書は建前の文書になりがちで、例えば、情報が重要というのはみんなが言う。しかし、本当に重要だと思っている人が何人いるのか。つまり、日本の場合は縦割社会だから、その業界の中の情報が一番優先される。だから、行政で言えば国からきた情報が優先されて、国から来た書類に鑑を付けてそれで起案になってしまう。そういう情報ヒエラルキーというか、情報に対する優先順位。これが、日本の場合は縦割りの業界の中の情報が一番優先されていて、それに実はほとんど抵抗感がない。口では多様な情報と言いながら。

都道府県が国と交渉する場合、国からきた情報だけでは不十分。そういうものが伝わるようなものになったらよいと思っている。

各行政窓口がIターンやUターンして来た人たちに多様なサービスを準備しているが、分かりづらい。どこに自分の必要な情報を持っている窓口があるのか分からない。これは前にも話したように、図書館とは図書館自体がメディアである。公共施設の中で、来館者が一番多いわけだから。図書館自体がメディアになって必要な情報がどこにあるかということを仲介する。そういう意味では、「市役所のここに行けばよい」、「この誰々さんに」みたいなところまで泥臭くやる。ハイブリッド図書館などと言うと、スマートな感じがするが、建付けとか設備とかはスマートでもよいが、「何々課の何々さん、何々係長に言ったらよい」みたいな、そういう泥臭いことをやる。図書館がそういう仲介メディアになることが重要だろうと思っている。

委員が言っていることに私は賛成で、教育委員会に図書館を置いている先進国は少なく、隣の韓国だって違う。それ自体よいとか悪いとかの議論は置いておくとして。アメリカは州単位になるとほとんど図書館省。教育委員会と別

に図書館委員会が並列にある。だから、やはり欧米先進国のイメージでは単なる教育機関ではない。違う捉え方をしていると思う。

大学との関係のところでは委員が非常に重要なことを言った。やはり情報の量。例えばアメリカのアリゾナ州、砂漠の真ん中の田舎の州だが、そこで、まさに地域間競争をやらなければならない。アリゾナ州は何をしたかという、アリゾナ大学に優秀な研究者を引っ張ってきた。アリゾナ大学は、今や天文学や生物学で、非常に先進的な研究をやっている。砂漠の中の田舎で、地域間競争をやるために大学を作って、優秀な研究者を呼んできた結果、そこに学生も集まってくる。だから、地域おこしまでもが全部つながっている。

そのときに、大学の図書館の情報だけではどうしようもなく、地域にある情報が全部共有化されている。情報の共有化ということだと私は思う。だから、小学校も中学校も、高校も大学も、そして図書館も、そこで持っているものが本だけじゃなくて、もちろんデータベースも、博物館、美術館が持っているものも。そういうものが全部リンクするような、そういうような仕組みを作ったらよいと思う。そういうことが全体として感じられるような計画書になったら。

基本的に、委員も言ったように各項目で述べられていることはかなりのよいところまでできていると思う。これからこういった図書館計画書をつくる自治体のモデルになるような計画書ができつつあるのではないか。これはやはり図書館の皆さんの頑張りだと思う。その結果が反映されている。そして、最後のシェイプアップの段階にきていると感じる。

それで、個別のところの話をしてよろしいか。

【委員】

願います。

【委員】

この資料4の26ページからはじまる。これは要するに、大きな1の(1)から(2)、大きな2の(1)から(4)はサービスの手法、サービスの内容のこと。そして、大きな3が、「利用者対象者別の図書館サービス」ということで、利用者別に述べられている。どの計画書でもこういう書き方をせざるを得ず、仕方がない。しかし、この書き方の最大の問題は、児童サービスとか障害者サービスとか、そういうものが別個のサービスだと思われること。全般のレファレンスとか情報提供のサービスがあって、それ以外に児童サービスや障害者サービス、外国人に対するサービスがあると読めてしまう。本当は違う。全般の情報提供やレファレンスというサービスは、子どもや障害者、外国人にも同様に提供される。だから、本当はマトリクスになってないといけない。だから、そこを「利用者対象者別の図書館サービスの充実」の最初のところで、「これまで述べてきたさまざまなサービス手法を用いて、この特徴的な利用者それぞれにあったサービスを行う」といった一言をはっきり明示したらどうだろうかと思う。

個別に気が付いたところで、37ページの高知県関係資料。ここで、やはり連携というのが必要ではないかと思う。高知関係資料は図書館だけにあるわけではなくて、大学にもあったり博物館にあったり、例えば有名な植物園もあり、そういうところに散在している。先ほど話したように、地域にある情報の共有化ということを考えると、やはり連携が非常に重要だと。どこかの博物館、どこかの大学、どこかの図書館に行けば、それぞれのものが全部分かるようにするというようなことで、やはり連携の項目が必要かと。

それから、39ページの児童サービスの連携のところ、いきなり「高知みらい科学館との連携」という言葉だけが出てくる。児童サービスでの連携というのは、同じ建物の中の施設との連携だけではない。もう少し広い連携が児童サービスのために必要だといった表現があったほうがよいと思う。特に地域資料で、子ども向けの地域資料はほとんどなくて苦労する。子どもが地域のことを勉強する、子どものときから郷土愛を育てるためには、やはり地域の子どものに伝わるようになっていなければならない。そのためには優れた資料がないといけない。あるいは情報がスムーズに流れなければいけない。そういう意味では、この連携のところは、結構重要ではないかという気がする。

それから、41 ページのヤングアダルトのところ、ティーンズ・サービス。連携のところの「他機関と連携した取組の実施」の内容。「専門機関と連携してさまざまな事情を抱えるティーンズへの学び」は、すごく重要。このティーンズのところは、やはり全体の基調としては、ここがポイントだと思う。ほとんどの日本の図書館のヤングアダルトサービスは、図書館に自分が来るようなよい子ちゃんだけしか相手にしない。

これは前にも話したが、アメリカのティーンズは違う。道端でピストルを撃ち合っているようなやつ首根っこ押さえて、真っ当な人間になれと言って図書館に連れてくるようなサービスである。本当は、例えば少年院とか、そういういろいろな問題を抱えている子どもたちがいる施設に図書館から出かけていくと。だから、ここは、アウトリーチもほしいという気がする。困っている、自分でもどうしようもない、そういう問題を抱えた子どもたちのところにアウトリーチしていくという取組がもう少しあったら、素晴らしいのではないと思う。

これは、プライバシーの問題もあっていろいろ難しいが、大学でも今、心の相談室みたいなものをキャンパスの中に作らざるを得ない状況がある。だから、そういうところと連携が取れるとよいと感じる。

要するに、不登校の問題も児童サービスのほうに入れるか、こっちに入れるか、迷うところだが。公共図書館に行くことによって学校に登校しているとみなし、登校日としてカウントするということを行っている教育委員会もある。そういう意味では、自殺防止といったことのために図書館が積極的に働くということをもう少し明示的に示してもよいかと思う。

それから、「学びの場を提供します」という学びだけじゃなくて、「学び以前の生存、それから自立、そういうことについて支えます」ということ。神奈川県鎌倉市の図書館が「夏休みが終わって学校に行きたくない人は図書館においで」というのをやって有名になった。私は、鎌倉だけがやっているわけではなく、「全国の図書館で頑張っています」と言って欲しかったと思っているが、そういう部分がここにあればと思う。

それから、43 ページの多文化のところだが、これも日本に来て右も左も分からないような外国人をサポートするというのが多文化の中心課題だと思う。ここもやはりアウトリーチの項目があってもよいかという気がする。連携のところにはそれに近い表現があるが、具体的に春節の会で中国の人が集まっていればそこに出かけていく。いろいろなアラブ系のイスラムのお祭のときに図書館員が出かけて行くとか。そういうアウトリーチみたいな取組をもう少し表現してもよいのかと。限られた職員の人数でできるかどうかは分からないが、目指すという心意気みたいなところをと思う。

#### 【委員】

事務局のほういかがか。

#### 【事務局】

特に、ティーンズの部分でさまざまな事情を抱えるという記載があるが、いきなり少年院というのはなかなかハードルが高いかもしれない。現に、心の教育センターや県の教育センターなどと連携をしていて、教育センターが実施する仮想教室などで図書館の使い方などを授業の中で行うなど、そういう取組を昨年度からは始めている。高知県は特に、いじめ、不登校、そのへんが長年の積年の教育課題であるので、その点については私どもも教育課題の解決に向けていろいろな機関と今後もっと連携していく必要があると考えている。もう少し中身を書き加えたいと思う。

それと、アウトリーチについては、項目の記載自体はないが、実態としては、1人いるアウトリーチの担当職員が、各分野の関係機関に行って図書館のPRをして、それで一定、関係性ができつつあったらそれぞれのサービス担当にバトンを渡すかたちで今、つなぎをやっている。そういうかたちで、多文化にしても、ティーンズにしても、アウトリーチの項目を少し芽出しするかたちで示していけたらと思う。

#### 【委員】

今、事務局が言ったことは非常に重要なポイント。アウトリーチ専門の担当者がいて、その人がまず橋渡しをして、そして各担当がそのあと実際の連携をしていくという。これはどこかにきちんと書くべき。全国的に見ても、そういう積極的な業務体系を作っているところはない。

高知モデルというものを全国に発信していくうえで、その一つになるかと思う。アウトリーチは非常に重要だが、実際は各担当が忙しい中で、なかなかできない。だから、具体的な施策としてそういうことを考えて取り組んでいるというのは素晴らしいことだと思う。せっかくやっているのだから、そのことを明示するというのはどうか。

【事務局】

分かった。きちんと明示したいと思う。

【委員】

その他よろしいか。

【委員】

全体的に非常に良くなった。その辺は委員と委員と意見が一致しているところ。それで、先ほど委員から、行政文書という話があったが、そのようなことを踏まえず大学の人間として言うと、非常に素晴らしいが、我々が一般的に書くことでここに書いてないことがある。今までどうしてきたか。これは資料4の計画案では、1章から3章が該当する。予算を取るときも含めて。非常に頑張ってきて、成果も出ている。また、予算についても措置してもらっている。非常に順調である。

しかし、次に向かうためには課題がたくさんあるということで16ページがある。それで、17ページの4章から基本方針。だから、課題に対してはこういうふうを考えていく。それで、5章でより具体的な個々の計画として組み立てていくということだが。

私たち大学の人間が書く書類で最も重要なのは何かと言うと、「期待されるべき成果」である。つまり、これをやったこと、やらないことで、どれだけ高知県の未来が良くなるかということが、実は非常に大事かと。特に、高知県、あるいは高知市のように財政事情が非常に厳しいところで、これだけの図書館を組み立てていくなれば、県民、市民の支援は不可欠である。

そうすると、計画案は大変素晴らしいし、さらに、委員、委員からさらに素晴らしいものということで先進的な意見をもらっている。委員からは高知モデルになっていくものだということまで言ってもらっている。そこまで図書館関係者からして先進的であるとするならば、最後に、県民、市民にこれを進めることでどれだけ高知県、高知市が良くなっていくか、素晴らしいものになるのか、子どもたちの学びがどれだけ進展するのか、やはりいろいろなことで期待されるべき成果があっていいかと思う。

我々が研究申請すると、期待されるべき成果しか読まない審査員の先生がいるぐらいで、「これをやることで何かよいことがあるのか」というところから入ることも度々ある。それで、そういった意味でいくと、例えば基本理念で非常に先進的な話、3番のセーフティネット。情報弱者をなくす、情報弱者が生じないようにしようと。これは、県民、市民に対しては素晴らしい未来的なサービスというか、未来へ向けてのサービスだと思う。

このような中で、それでどこへ行くのかということを見ると、それがなかなか見えにくい。それで、行政の書類だから実際には非常に書きにくいのはよく分かっているが。例えば、20ページにサービス指標というかたちで示されている。恐らく、このサービス指標の大変さやすごさは、どこまでダイレクトに県民、市民に伝わるかという、私は難しいと思う。例えば、広報の30回が40回になったことの意義は、やはりなかなか見えにくいと個人的には思っている。それで、例えば先ほど話題にもなったが、漫画で移住の紹介というのがあった。さすがの私も、この漫画を読むと非常に有意

義なプロジェクトだということが分かるし、説明も非常に楽になると思って拝見した。これを見たら、批判的な人が相当減るだろうと思っている。

つまり、そういう点で2期計画ということであるならば、計画の達成すべき概念的な目標を書くということを考えてもらってよいかと。今1期計画を踏まえているわけだが、建物のないところで一生懸命計画を立てて理念を語っていたのが1期計画。しかし、その1期計画の理念なり考え方は、相当程度実現をしている。また、それに対する実際の利用というか、県民、市民の支持もあると思っている。それで、せっかく2期計画に行くので、「今度はここまでいく」という宣言のようなものを入れられたらというのが私の意見である。

個別の意見については、各委員にいろいろと言っていることもあり、今回大きく直してもらっているところもたくさんあるので、特に追加で申し上げることはないが、やはりゴールを見てもらったほうが、やはり地元の皆さんの支持を得られるというのが私の意見である。

【委員】

事務局からお願いします。

【事務局】

内部で検討させていただきたいと思う。

【委員】

まだ少し時間がある。委員いかがか。

【委員】

先ほどのアウトリーチに関連して、委員がアウトリーチのことをもっと強調したらという話があった。高知方式という意味で言えば、そういったもので隠れているものが結構ありそうな気がする。

先ほど私が言った「弱者を作らないために、幼保から高校まで一気通貫で」というのも、よそではできない。高知以外では、そのようなやり方はできない。なぜなら、日常的に自分たちがどういうことをやっているかというキャッチボールをできるような環境にある県立と市町村立はないから。それから、そういったものを含めてオーテピアは、確かに県立と市立が同居してなかなか大変なこともあるが、でも同居しているからこそこういったこともできるということも一つ。

それから、アウトリーチとは別に、他ではやっていないようなサービスをここではやっているというところ。その辺について、オーテピアは本当はすごいということ。建物がすごいだけでなく、やってること自体が実はすごいことで、はじまったばかりだが、今やろうとしていることは、全国を見た場合でも、1歩、2歩先を行こうとしているようなことだというようなことをある程度まとめて知らせたい。

それは、計画の中に全部それをひとまとめにして書けということではないが、でも、それをきちんと自分たちも自覚したうえで、「オーテピアはどういう図書館なのか」と問われたときに、「こういった面で全国の中でも突出した部分を持っている図書館だ」といえるように。先ほどのSDGsではないが、聞かれたらそういったことがすぐ答えられるように、一応整理して持っているべきかと思う。

【委員】

ありがとうございました。委員お願いします。

【委員】

委員が言った効果について。行政文章では、これをやったらこうなるとはなかなか言いづらい。ならなかったらどうするのかという話にすぐなってしまうので。だから、役所や知事、政治家は慎重に言葉を選んでしまう。

それで、評価については今まで何回も言ったが、例えば、商店街の売上げがこれだけ上がったとか、そういう事実で表していく工夫をする必要があるかと。前にも話したが、アメリカの図書館の場合には地域の経済効果みたいなものを計算する。だから、その評価の手法についても、できれば高知モデルを作れたらよいと思う。

そういう意味では、先ほどの漫画みたいな事実は誰も否定できない。だから、「事実をもって語らしめる」ということで、事例を集めていく。だから、この計画書にも例えばQRコードか何かを付けておいて、そこをクリックすればいろいろなものが見られるみたいな。

また、少し時間を数分拝借して、そういうものを見てみたいと思うがよいか。

【委員】

願います。

…… 映像の共有 ……

【委員】

どうか。

【委員】

鳥取県立の事例なので、若干コメントをしたい。

今は鳥取県でいうと、最初に大きな成功例になったもの。この方は普通の会社員だったが、通勤のときに、台風通過後、シャッターがべらんべらんになっているのを見て何とかならないかと考えて、昔々心張り棒みたいなものがあったことをイメージしたがそこで止まっていた。それを何とか起業したいと思ったときに、図書館でビジネス支援の相談を受けてくれるということを知って図書館にやってきた。

見てもらったら分かるが、例えばシャッターがどれぐらいあるか、どれぐらいの破損があるか。それから年間の売上げはどれぐらいなのかだとか、図書館がさまざまなデータを提供する。それから、あと人的なつながりとしてはデザイナーを紹介するとか。それから、県の指定研究機関あるいはお金の借り方。そういったところまでつないで、その人は最終的に起業する。先ほどはごく簡単な内容だったが、大規模施設である東京ビッグサイトだとかの巨大なシャッターを風から守るといふ、そういうものも新たに開発してそれなりの成果を上げたのがこの例である。

こういったことも図書館でできるということをもんが王国と言っている手前、漫画で作っていろいろなところに配って歩くとすぐに、「あっ、図書館ってこういうこともあるのか」と理解してもらえる。でも、これは実はかなり前の話で、これ以降もここまで劇的な事例はなかなか少ないが、鳥取県立を利用した起業はある。

うちの県では 20 年近く前からやっているが、ビジネス支援という名前は掲げているけどもそこまで全面的なサポートをしていない図書館が多く、ビジネス支援という言葉が中途半端に終わっているのは少々残念だと思っている。

【委員】

今、漫画が画面に出ているか。

【委員】

出ている。

【委員】

今、委員が言ったように、ビジネス支援というと会社経営の本を貸せばよいというような誤解がある。映像でもあったように商材というか。その会社で利益を上げるためのビジネスモデル、何を売るかというところ。そこについての情報は、企業センターとか産業センターとか、商工会議所には実はない。森羅万象が商売の売り物になる。そういう売り物になる情報は図書館には大量にある。だから、そこが整理しなければならないところだと思う。

この漫画を見れば分かるが、創業センターに相談に行っても、総論賛成、各論NGみたいに、「それはどうだろうか」と、この方は2、3年時間を無駄にしてしまった。その後、図書館に行って風力学だとか台風の情報だとか、そういうものが実は会社の立ち上げで役に立っている。もちろん公庫を紹介してもらったりデザイナー紹介してもらったりだとか。だから、いわゆる創業センターや商工会議所があれば大丈夫という議論がすぐ出てくるが、そうではなくていわゆる会社で何を売るかという情報については、実は中小企業診断士の事務所に行ってもないし、そういうところが実は図書館の提供できるところだ。

こういう具体的な事例をいくつかこういう報告書の資料編のところに載せて、そして、先ほどの委員が言ったように、「こういうように社会に貢献できる」みたいな文章も少し出す。そういう組み合わせかなと思う。

【委員】

委員いかがか。

【委員】

なかなか面白い提案で、私などは、「じゃあ漫画も本体に載せるか」と言いかねないところである。でも、それくらいの勢いは必要だというのは、基本構想に参加したときから思っている。合築もそうだが、高知県、高知市の財政事情を考えると、とてつもない図書館になっている。その予算なり、規模なりに見合う成果も出ているということで、各委員からいろいろな意見をもらったが、細部まで協議して進展させていく。

全国のモデルになるレベルまで引き上げていくとなると、さらに地元の皆様の支持、支援が必須かと思う。その感じからすると、既存の成果もちろん大事だが、これから期待される成果ということに私はこだわっている。今まで1期計画で成し遂げたことと、2期計画でやりたい、達成を目標としていることを示して、やはり県民、市民の理解をもらわないと。今回は議会の理解をもらって、資料費も措置してもらっているが、引き続き発展させていくためにはやはり理解をしてもらう努力も必要と思う。

【委員】

図書館というのは、やはり文化的なイメージが強いと前に話したが、今見てもらったような資料を付けるのと同時に、どこか、前書きみたいなところがよいと思うが、例えば、ビジネス支援をやれば地元で創業、起業ができる、あるいは売り上げを上げられると。売り上げが上がったり、新しい企業ができたりすれば、そこから税金を取ることができる。つまり、図書館というのは税収増、つまり行政の収入を増やす役割を果たせるとはっきり書くべきだと思う。

私も館長だったときに、議会の説明とかでそういう話を一生懸命した。図書館で金儲けができるとか税金が増えるとは普通思わない。だから、具体的にどこかに書いたほうがよいと思う。

【委員】

事務局いかがか。

## 【事務局】

少し時間をもらって内部で検討したいと思う。

## 【委員】

今、委員が言ったことに関連してだが、先ほど私が挙げた四つの項目は、実は全部それにつながる。移住の話もそうで、移住ということによって地域に人が入ってくる。それは、交付税にもつながれば、税にもつながる。それから、その人たちが活動することによってさらに新しいものが起こってくれば、そこから収入が上がってくる。

それから、情報弱者を作らないというのは、これは逆に行政の支出をそれだけ少なくできるということ。情報弱者を作ってしまう、あるいは将来的にそれが生じてしまう制度をそのまま残しておくということは、将来的にその人たちが困ったときのサポートを、公共はどうやっていくのか。結局そのところにはかなり大きな金がかかってくる。しかも、そこからは税は上がってこない。

大学もそうである。大学のことをなぜあれだけ支援どうのこうのと言うかといったら、大学が地域の経済に対して大きな影響を与えている。それは、学生がいるということもそうだが、それ以上に農林だとか商工だとか、さまざまな分野で大学の知識が使われて我々は活動している。それは当然のことながら県民の収入、企業の収入につながっている。

というように、図書館がメインでやることは、文化だとか読書だとかといったイメージで語られるのではなく、図書館が本気でやることは、我々の生活向上や収入につながるというイメージを持ってもらいたい。それを、変な言い方だが、私が館長になって思ったのは、当時のままの趣味的だと思われていたのでは、資料費 1 億などあつという間に削られてしまう。ではそれをどうするのかと言えば、そうではなく図書館は先ほどから何遍も言っているが、中心に座っているいろいろなものに影響を与えて地域を高上げていく。当然、その先には税金が入ってくるだとか無駄な支出が出ていかないように我々がカバーすることができる。

だから、図書館に投資するのは決して無駄なお金ではない。お金がなくなってくると、どうしても文化だとか教養だとかそういうところから削ろうとするが、そうではないということを理解してもらうのは、非常に大事だと思う。

とりあえず、鳥取県は 1 億になってから 20 年ぐらい守っており私は今の知事は切らないと思う。なぜかと言うと、それが全国的に評価されているということをやはり知事としては喜んでいるから。それは自分の手柄の一つでもあるわけで、当たり前だが。

それと、現実の動きとして鳥取では大学だとかさまざまなところから図書館のサポートについて話が入ってきている。特に、前者のことを考えると、例えば 1 億を 9,500 万に、500 万を切って 500 万儲かるかというそういう話ではないと思う。全国的な規模で言ったら、鳥取県立図書館で 1 億を 9,500 万にしたら、周りから見たときに、鳥取県はいよいよ金がなくなって、今まで前を走っていたはずの県立図書館に手を付けたと見られるだけだと思う。

今すぐに高知県がそうなれとは言わないが、先ほどから言っている高知方式で、全国に先駆けているいろいろなことをやっている。それに成果がついてくるようなかたちをつくり上げていければ、いかに図書館が投資効率のよいものか、税収だとかさまざまなものにつながるのかということを理解してもらえらると思うので、そのところは相当に意識してアピールしてほしい。

そういうかたちでないと、もうこれから先の図書館はたぶん守れないと思う。それこそ先ほど委員が言ったが、今の委員 4 名は合築するかしないかということからずっと付き合っているので、思うところはそれぞれあると思うが、やはりなんとかこの図書館をよい方向に持っていかうとしている。それであれば、今、委員が言ったのもそれはそれだと思う。将来像として我々はここを目指しているが、もっとはっきりしようというような意味合いは、私はそういうことだろうと思う。

だから、繰り返しになるが、図書館というのが決してお金をジャブジャブ注ぎ込んでいるところではなくて、本当に有効なお金だというイメージをどう持ってもらおうか。

【委員】

委員お願いする。

【委員】

先ほど話したように、どこかに文章で明記するということが。ビジネス支援をやれば税収が増える。それから、医療健康情報を提供すれば市民、県民が健康になって、行政の医療関係の支出が減ると言う。それから、障害者サービスで言えば、障害者が自立して働くようになれば納税者になる。そういう意味で、支出を減らし税収を増やすことができる。せめてそういうかたちにどこかでまとめて、各サービスが税収の増加やそれから支出の削減につながるということを明示してもよいと思う。

【委員】

事務局いかがか。

【事務局】

内部で共有したいと思う。

【委員】

予定時間が迫っている。ごく簡単に一言だけ。この会議、いつも思うことだが、いわゆる普通の会議ではなくて、私にとっては勉強会で、多くの参加者にとっても「そうか」と思う内容であり、いかにもある意味、図書館の会議にふさわしいと思う。

もう一つ思うことは、我々は一連の流れの中で議論しているので、どうしてそういう展開になっているのかがだいたい分かっているが、もし、例えば旧来の図書館をイメージに持っている方がこの会議を傍聴すれば、「これほどこの会議だ。図書館の会議だろうか」という感想を持つのではないだろうか。ましてや、特に図書館に興味のない方に、「我々の図書館はこういうことを考えている」と言っても、意味不明ではないかと思う。

だから、我々のサービス計画は、私も非常によいところまでできていると思うが、ただ、やはりユーザーの方、関係者の方の理解、協力が得られたうえでの計画である。その説明、内容、それから、今さまざまな指摘のあったポイントがやはり鍵になるかなと思う。

これは決して、我々にとっては「絵に描いた餅」ではなく達成可能な目標、それこそSDGsだが、その理解、協力、納得をもらうには、やはりこれから本当に頑張らねばいけない。

ただし、計画自体は、胸を張って県民、市民、関係者に提示ができる内容になっていると思う。だから、一層頑張ってもらいたい。

それから、特に委員、委員からは、これから我々が進化すべき方向、進化型図書館の向かうべき方向を非常に明確に示してもらったと思う。

こういう時代状況の中で、適応しなければ進化できない面もあるが、我々はやはり意思統一を図って、本当のあるべき図書館を模索するという意味で、最大限の努力を尽くし、その結果、我々が作った計画がこれだけの成果をもたらすという、そこまで見込んだ計画であってほしいという指摘だったと思う。誠にそのとおりだと思う。課題ばかりが増えてしまった会議かもしれないが、図書館のあるべき姿、それから正しい方向を確認できたと思う。だからこそ、今後一層の努力をお願いしたい。

それでは、事務局で検討してもらった課題が増えたが、委員から出た意見を十分に踏まえて第2期計画の策定、それから図書館運営を進めるようお願いする。

少し時間オーバーしているが、最後に議事 3 その他について事務局から願います。

【事務局】

※議事（3）その他について説明

【委員】

今後の修正等では、私と事務局との判断で決めていかななくてはならない点があると思うので、ご承知おきください。ただし、情報に関してはできる限り共用できるようにしたいと思う。

本日の議題は以上である。さまざまな意見、しかもかなり高度な意見をいただいた。